The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複合係助詞モゾ、モコソの叙法性
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 1996, 65, p. 14-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68887
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

複合係助詞モゾ、モコソの叙法性

高山善行

はじめに

複合係助詞モゾ、モコソは一般に「危惧を表す」と言われている。両形式は係助詞の特殊な語法として注意されてはいるが、その特殊性の内実については明らかにされていないように思われる。本稿では、モゾ、モコソを構文的機能の観点から捉え直し、その叙法性について考えてみたい。

一　研究のながれ

『詞の玉緒』に次のような記述がある。

「これ（＝モゾ）は行末をかねておしはかりて、あやぶむ意のてにをは也。つねの『ぞ』と一つながら意かはる也。」（巻三）

「『もこそ』は行末をおしはかりてあやぶむ意の辞也。つねの『こそ』と意かはれり」（巻五）

モゾ、モコソが《危惧》を表わすとする、現在ほぼ常識的とも言える理解は、この記述によって方向づけられたと言えるであろう。[1] その後、もっぱら、《危惧》という情意的意味の有無が研究の焦点とされるようになった。その結果、反例もごくわずかに認められはするが、中古のモゾ、モコソに関して原則的に《危惧》が確認されたことは一応の成果であると言っていいだろう。

しかし、そうした成果は認められるにしても、《危惧》という側面からモゾ、モコソを見ていくことは、一面的な理解にすぎないのではないかと思われる。『詞の玉緒』の記述では、単に「あやぶむ」ではなく、「おしはかりて、あやぶむ」なのであって、「おしはかり」の面についても目が向けられなければならない。

本来、「あやぶむ」として注意された《危惧》の側面は文における情意的意味であって、モゾ、モコソという形式そのものが担っているわけではない。たとえば、

① 来年、入学試験で不合格になるかもしれない。

という場合、文としては《危惧》を表していると見てよいが、カモシレナイが直接その意味を担っているわけではない。当然、実現を望んでいる事態についても、

② 来年、入学試験で合格するかもしれない。

と言えるわけで、カモシレナイは《危惧》―《期待》の対立についてはニュートラルであると言うべきであろう。ただし、実際、使用される際には、《危惧》に偏る可能性が高いかもしれない。《期待》を明示的に表現しようとするなら、願望表現を用いればよいのであって、わざわざ推量表現を用いる必要はないからである。[2] つまり、そ

のような文の情意的意味は、語用論的なレベルで扱われるべきものであり、形式の意味として扱えるものではないのである。

というようなことは、モゾ、モコソについても言えるのではなかろうか。モゾ、モコソという形式そのものにとってまず押さえておくべきものは、「おしはかり」の面、つまり叙法性ではないか。この面についての分析が切り捨てられたことによって、モゾ、モコソが他の形式との連関を問われることなく、孤立してしまうことになったのである。《危惧》への注意によって、自ずから使用される場面、文脈の分析に傾くこととなった。現在の段階においても、その範囲から抜け切れていないように思われる。

このような研究史の把握の上に立って、モゾ、モコソの研究において今後なされるべきことはおおよそ以下の三点であろう。

(Ⅰ) モゾ、モコソの構文的観点からの分析。

(Ⅱ) 古代語の叙法体系における位置づけ。

(Ⅲ) モとゾ、コソが組み合わされたとき、特殊な意味が出てくることの説明。[3]

ただし、(Ⅱ)(Ⅲ)は個別論の枠内で扱えるものではない。そこで、本稿では(Ⅰ)にしぼって考究をおこなう。

二　現象の観察

モゾ、モコソは中古において盛んに用いられた形式である。上代においては確かな例が見つかっていない。たとえば、

③　恋にもそ人は死にする（恋尓毛曽人者死為）水無瀬河下ゆ吾痩す月に日に異に[4]（万葉集五六　笠女郎）

は、諸注釈書の示すとおり、モの並列用法として処理しうるもので

〔表1〕　用例の分布

	モ　ゾ	モコソ		モ　ゾ	モコソ
竹取物語	0	0	古今集	0	2
伊勢物語	1	0	後撰集	0	6
大和物語	2	0	拾遺集	0	9
平中物語	0	2	後拾遺集	0	2
土佐日記	0	1	金葉集	1	3
蜻蛉日記	2	9	詞花集	1	0
落窪物語	4	6	千載集	1	2
枕草子	5	2	新古今集	2	5
源氏物語	5	29			
更級日記	0	0			

あって、本稿で考究の対象とするモゾではない。また、モコソについては上代には用いられていないようである。[5] そこで、今回は中古の和文文学作品を資料として用いて考究をおこなうこととする。今回調査した作品および用例数は表1のとおりである。

ただし、シモゾ、シモコソの形は調査の対象から除く。シの添加によってモゾ、モコソとは性質が異なってくるため分けて扱うのが妥当であろう。[6] また、モが並列を表すものも本稿で扱おうとするものとは別種であるから、調査の対象から除いてある。

表1より、モゾ、モコソともに用例数はさほど多くないと言える。両者が全く用いられていない作品もいくつかある。また、数の上ではモゾよりもモコソの方が優勢である。以下、表1の全用例を対象として分析を試みたい。

二・一　結びの実態

従来の研究においては、モゾ、モコソの結びの実態について詳しく分析されていないように思われる。そこで、結びについて、述語用言、助動詞、終助詞の順に詳しく見ていくことにする。表2を参照されたい。

(1) 述語用言

まず、結びとなる述語用言の傾向を押さえておきたい。品詞別に見ると、結びになるのは動詞のみであり、広義の形容詞（形容動詞、名詞述語を含む）は結びとならない。では、どのような動詞が結びとなっているのだろうか。その具体的な内容については表3に示すとおりである。

表3を見ると、モゾ、モコソともに圧倒的に多いのは、存在詞アリであることがわかる。たとえば、以下のような例がある。

④　もし、こもりゐて、すかす人もこそあれと思ひて、たえて、その人の家ともいはざりければ、（平中物語）

⑤　かの語らひけることのすぢもぞこの文にある。（蜻蛉日記）

また、スの存在詞用法もこれに準じて扱えるものである。[7]

⑥　また、おのずから聞きつけて、うらみもぞする、あいなし。（枕草子）

⑦　桜花けふよく見てむ呉竹のひとよのほどに散りもこそすれ（後撰集五）

次に目立つのが、「見る」「聞く」「思ふ」「知る」のように、知覚・思考を表わすタイプである。

⑧　紫の色には咲くなむさし野の草のゆかりと人もこそ見れ（拾遺集三〇）

⑨　そこに娘ありといふことはなべて知る人もあらじ。人異様にもこそ聞け。（蜻蛉日記）

⑩　かくばかり憂きを忍びてながらへばこれより勝る物もこそ思へ（新古今一二一）

⑪　花見れば心さへにぞ移りける色には出でじ人もこそ知れ（古今集一〇四）

さらに、「なる」に代表される状況変化を表すタイプもある。

⑫　「げに憎くもぞなる。さらばな見えそ。」とて、（枕草子）

⑬　（弁の尼）「人済すこともはべらぬに。聞きにくきこともこそ出でまうで来れ」と、苦しげに思ひたれど、（源氏、東屋）

用例数は多くないが、動作、運動を表すタイプも見られる。

〔表2〕 モゾ、モコソの結び

	モ　ゾ	モ　コ　ソ
竹取物語	−	−
伊勢物語	（思ひ）つく	−
大和物語	1（急ぎ）する 2（香）つく	− −
平中物語	− −	1（人）あれ 2（少し）遅るれ
土佐日記	−	（怨じ）し給べ
蜻蛉日記	1（すぢ）ある 2（さ）ある	1（ある）あれ 2（日を）ふれ 3（死に）すれ 4（者に）あれ 5（やうに）あれ 6（こと）あれ 7（異様に）聞け 8（身と）なれ 9（松）あれ
落窪物語	1（心おとり）せさせ給ふ 2（おそく）縫ふ 3（思ひ）かへる 4（こと）ある − −	1（人）来れ 2（人）来れ 3（人）聞け 4（こと）あれ 5（笑ひ）すれ 6（ことに）あれ
枕草子	1（こと）侍る 2（憎く）なる 3（あらはに）ある 4（心）得給ふ 5（うらみ）する	1（と）見侍れ 2（こと）あれ − − −

源氏物語	1（人）ある 2（人）目立つる 3（罪）得給ふ 4（やう）はべる 5（こと）ある －	1（聞き）すれ 2（はしたなう）思せ 3　× 4（風）吹け 5（目）とめたまへ 6（人）見たてまつりとがむれ 7（人あやしと見とがめ）すれ 8（月）いれ 9（月日）あれ 10（はかなくなり）すれ 11（ものしく）思せ 12（あらはに）あれ 13（思ひ）添へ 14（やう）あれ 15（残り）すれ 16（心）つきはべれ 17（あらはに）あれ 18（女房）言ひなせ 19（人）はべれ 20（こと）はべれ 21（あらはに）あれ 22（心）出でくれ 23（罪）得れ 24（人）漏れ聞きはべれ 25（こと）出でまうで来れ 26（こと）あれ 27（逢ひ見で）なれ 28（けしき）見ゆれ 29（人）見つけて騒がる
更級日記	－	－
古今集	－ －	1（人）知れ 2（待ち）すれ

後撰集	―	1（香に）しめ
	―	2（散り）すれ
	―	3（折）あれ
	―	4（罪）得れ
	―	5（瀬を）見れ
	―	6（なり）すれ
拾遺集	―	1（香に）しめ
	―	2（春）あれ
	―	3（明け）すれ
	―	4（散り）すれ
	―	5（人）見れ
	―	6（人）見れ
	―	7（あり）すれ
	―	8（道）行け
	―	9（立ち）聞け
後拾遺集	―	1（人）あれ
	―	2（人）見れ
金葉集	（嵐）ふく	1（洩り）すれ
	―	2（消え）すれ
	―	3（濡れ）すれ
詞花集	（くもり）する	―
千載集	（乱れ）する	1（波）越せ
	―	2（人）あれ
新古今集	1（弱り）する	1（人）とへ
	2（かへり）する	2（鳥）立て
	―	3（人）あれ
	―	4（見え）すれ
	―	5（物）思へ

〔表3〕 結びの動詞

モ　ゾ		モ　コ　ソ			
す	7	あり	20	知る	1
あり	6	す	17	（心）つく	1
侍り	2	見る	9	（人）訪ふ	1
つく	2	聞く	4	行く	1
（罪）得	2	思ふ	4	言ひなす	1
目立つ	1	なる	2	（鳥）立つ	1
（思ひ）かへる	1	出で来	2	（波）越す	1
なる	1	（罪）得る	2	（風）吹く	1
縫ふ	1	しむ	2	（月）入る	1
吹く	1	（人）来	2	経	1
		侍り	2	遅る	1

⑭ うへの衣裁ちておこせたり。又、おそくもぞ縫ふとおぼして、（落窪物語）

⑮ いずれぞと露のやどりをわかむまに小笹が原に風もこそ吹け（源氏、花宴）

量的には、存在詞類（アリ、ス、侍リ）がモゾ、モコソ全用例中の半数以上を占めている。すなわち、

【名詞　＋　モゾ／モコソ　＋　アリ】

【動詞連用形　＋　モゾ／モコソ　＋　ス】

という型式が定型的に用いられていると言えよう。

このように、事態の存在を表す場合が多いのだが、その事態とは今後成立可能な事態なのである。よって、結果的に、新たな事態の出現を表すことになる。「〜トイウ事態ガアル」は「〜トイウ事態ガ起キル」の意に等しいであろう。

⑯ さきのやうにくやしきこともこそあれ。なほしばし身を去りなん。（蜻蛉日記）

⑰ 「なほこのことのたまへ。非常に、おなじことともこそあれ」といふを、（枕草子）

成立可能な事態を持ち出すことによって、未来指向の時間性を帯びるが、それは助動詞ムにおいて見られるものと同質であろう。また、存在のありようは「〜トイウ事態ニナル」という形でも現れる。これが状況変化を表すタイプである。

次に、描かれる事態の意味内容に注目すると、人為的なものに偏るようである。知覚・思考タイプの動詞はそれを端的に表している。「知られたくないことを人が知っていしまう」ということが《危惧》の対象となることがはっきり出てくる。それは、漠然とした将来へ

の不安といったものではなく、かなり具体的なそして、近いうちに実現する可能性の高い事態なのである。

（2）助動詞

助動詞が結びとなったのは、ル（受身）の一例だけである。[8]

⑱　こなたの対の北面に住みける下蔦女房の、この障子は、とみのことにて、開けながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれと思ひければ、まどひ入る。（源氏、蜻蛉）

ルは接尾語性の強いものであるから、原則的には助動詞は結びにならないと言えよう。通常の係助詞は、助動詞を結びとすることがあるが、モゾ、モコソはそれを忌避している点がきわめて特殊である。

助動詞が結びにならないということは、結局、述語用言が様相的意味を分化しないということである。様相的意味とは、助動詞一般が表わす文法的意味を指すが、これらの意味が抑えられているということは、モゾ、モコソの結びになる述語の外様相性を表すものである。

ここで様相的意味が分化しないということに立ち入ってみよう。《過去》《完了》というテンス・アスペクト的意味が顕在化しないことによって、消極的には事態の《未来》（現在の延長としての）《未完了》が表されていると言える。モゾ、モコソ文が、もっぱら未来に成立する事態に関与することの根拠はここに認められるであろう。

次に、《否定》《推量》については、広義叙法性の未分化として一括することができる。推量の助動詞が結びにならないことは、すでに注意されていたことではあった。『詞の玉緒』に

「結びは常の『ぞ』に同じ。但し『ん』と結べる例はなし。『せん』などといふべき所をも、『する』とやうにむすびたり。」（「もぞ」の項）

とあり、「む」が結びとならないこと、結びが動詞の裸の形をとることを指摘している。この問題に関して、松尾聡（一九六四）は、

「危惧の『もぞ』『もこそ』が、未来の、もともと不確実なことを述べるのにもかかわらず、（さらに仮定条件をまで承けながらも）なお推量の助動詞を伴わないのは、伴わないことによって、未然のことに対する『必然の見込み』を、それなりに強くあらわそうとするためであろうとするのが、いちおうの通説である」

と述べているが、ここで示された通説の解釈はおそらく正しくないであろう。推量の助動詞が結びにならないことは推量の確実性の問題ではなく、モゾ、モコソによる表現がモーダルな意味を帯びていることを表すものと理解される。古代語においても現代語においても、推量的判断の表現形式は通常、一文中に一回だけしか現れないのであって、推量の助動詞がお互いに承接しないことは、よく知られているが、モゾ、モコソによる表現にモーダルな意味が備わっているとすれば、もはや、結びとして推量の助動詞は必要がないのではないか。《否定》が結びにならないことも、推量の助動詞が否定化されないのと同様に考えられよう。

係助詞は通常、文構成の領域で働くのだが、モゾ、モコソはむしろ、助動詞が担う《推量》を結果的に実現していることが予想されるのである。

（3）終助詞

今回の調査によれば、終助詞が結びとなった例は見つからなかった。この結果から、モゾ、モコソの「聞き手めあて」の機能に関して二通りの解釈が可能であろう。

一つは、モゾ、モコソそのもので「聞き手めあて」性を担いうるという解釈であり、もう一つは、逆に、モゾ、モコソはその機能に関わらないという解釈である。用例を見る限り、

⑲ さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへ追ひやらむとす。（伊勢物語）

⑳（夕霧）「こはいかにおぼゆる心ぞ。あるまじき思ひもこそ添へ。……」とみづから思い紛らはし、～（源氏、野分）

のように、そのほとんどが心中思惟において用いられており、積極的な「聞き手めあて」性は感じられない。そこで、後者の解釈を取ることにしたい。いわゆる、「聞き手めあて」ではなく、「事態めあて」に働く形式であると考えておくことにする。

ただ、結びに連体形、已然形を要求すること、従属句で用いられず、常に主句で用いられることなど、機能的な面においては係助詞としてのゾ、コソの性質がよく保存されていると見てよい。文法機能の面では係助詞的だが、意味の面ではむしろ助動詞的であるところにモゾ、モコソの特殊性があることに注意されなければならないのである。

二・二　仮定条件句との関係

モゾ、モコソは仮定条件句を承けた主句で用いられる。この事実については、『あゆひ抄』に

「多くは上にかくの如く［ば］とあらまして詠めり。」（巻二・四　も家）

という記述があり、後の研究においても今回の調査においてもその事実は確認されている。たとえば、以下のようである。

㉑ いなやきじ人にならせるかりごろもわが身にふれば憂きかもぞつく（大和物語）

㉒ 秋山の清水はくまじにごりなばやどれる月のくもりもぞする（詞花集一〇五）

㉓ 常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出で来れ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむ、と思ひ離る。（源氏、早蕨）

仮定表現との呼応については、従来の研究でも注意されてはいるが、モゾ、モコソの個別論の枠内で論じているため、その意義については明らかにされていない。ここで、視野を広げて仮定表現の帰結全体において見ると、どのようなことが見えてくるだろうか。

山口堯二（一九八〇）では、順接の仮定条件表現について、

「その条件が成立する限り、例外なくその帰結が成立すると保証するような意味あいが一般に認められる」（『古代接続法の研究』九二頁）

「可能性の表現形式である仮定の条件形式は、後句の帰結に主体の推量・意志・命令・反語などの志向を導く傾向が強い」（同右）

という包括的な記述がなされている。また、高山（一九九三）では、仮定条件句の帰結のモダリティに関して実態の調査、考究をおこなっ

ている。高山（一九三）のデータによれば、仮定条件句の帰結に推量の助動詞が配置されるという規則はかなり厳密なものであって、例外は少ない。係助詞が帰結句に生起した場合にもその規則性は働いており、必ず推量の助動詞を結びとする。逆に、推量の助動詞を結びとせず、用言の連体形、已然形で結ぶものは、先に挙げた係助詞では一つもないのである。もちろん係助詞が生起しない場合もある。しかし、その場合も推量の助動詞が結びにきている。ところが、モゾ、モコソは前節でも見てきたように、推量の助動詞を結びとせず、動詞の連体形、已然形で終止している。

この事実は、モゾ、モコソが係助詞一般とは質が異なることを表す。と同時に、モゾ、モコソ表現のモーダルな性質を表しているのではなかろうか。何らかのモーダルな意味を必要とする仮定表現の帰結表現として用いられていることがモゾ、モコソ表現のモーダルな性質を根拠づけるであろう。かつてなされたような個別論の枠内では、仮定条件句との呼応は、モゾ、モコソ表現における推量的判断の確実性と結びつけられがちであったが、視野を広げてみると、モーダルな性質を認めるための根拠として、改めて意義づけられることになるのである。

三　まとめ

以上の検討から、モゾ、モコソの叙法性については、構文的観点からの根拠が得られたものと思われる。つまり、未来に成立する事態を対象とし、それを《予測》するという意味においては、ムと連続していると考えられる。しかし、一方で係助詞としての文法機能も保存しており、その結果、主句でしか用いられないこと、文タイプとしては平叙文に限られること、結び用言が定型化していることなど使用の制約が多い形式であるという見方もできる。このあたりが、用例の量的な少なさにつながっているのかもしれない。モゾ、モコソは機能面では係助詞的であるが、意味の面においてはむしろ助動詞の領域にあると考えられる。つまり、係助詞と助動詞との中間的な場所に位置づけられる形式ということであろう。それが、本来係助詞の有していた性質の残余であるのか、あるいは、時代における新たな動きであるのかについては、通時的検討を俟たなければならない。

ただ、文の情意としての《危惧》は、先に述べた《予測》だけで成り立つものではない。それに否定的な価値の判断が加わってはじめて成り立つものである。その側面にはモが深く関与していると予想されるのであるが、これについては、モの個別論との関連において詳しく見ていく必要があろう。稿を改めて論じてみたい。

おわりに

今回は、もっぱら意味的観点から注目されてきたモゾ、モコソを構文的観点から捉え直してみた。解釈文法の立場から検討された場面、文脈における意味と文法機能との関係を問う視点は、従来の研究の蓄積を活用していく上で重要である。また、複合係助詞や連語的表現など、あまり目を向けられていない表現形式を掬い上げて体系的に位置づけていく上でも有効性を持つであろう。(9)

注

（1）　たとえば、「将来の事態を予測し、危ぶむ気持ちを表す。……か

もしれないから。……といけないから。」(『古語大辞典』(小学館)
モゾ、モコソの項目)「〜、悪い事態を予測し、それを不安に思う気持ちを表す」(山口堯二著『新編古典文法』文英堂)

(2) 推量の助動詞全体について、どの程度《危惧》を表すものがあるか調査する必要がある。

(3) モヤについても検討されなければならない。

(4) 「恋ででも人は死ぬものです」(『新編日本古典文学全集　万葉集①』小学館)、「恋の苦しみのためにだって人は死ぬことがあるもの」(『新潮日本古典集成　万葉集(一)』新潮社)など。

(5) 松尾(一九八四)の指摘による。

(6) 三浦(一九六七)の指摘による。

(7) 山田(一九三六)参照。

(8) 松尾(一九八四)参照。

(9) 山口(一九九〇)で取り上げられているニヤアラン、コソアメレのような係助詞を含んだ連語的形式などの詳しい記述が必要である。

◇用例調査に使用した注釈書　『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『源氏物語』『更級日記』(以上、『日本古典文学全集』・小学館)『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』(以上、『日本古典文学大系』・岩波書店)『落窪物語』(『新日本古典文学大系』・岩波書店)八代集(『新日本古典文学大系』・岩波書店)

【参考文献】

松下大三郎(一九二八)『改撰標準日本文法』(勉誠社)
山田孝雄(一九三六)『日本文法学概論』(宝文館)
三浦和雄(一九六七)「『もこそ』の係り結びの型と意味との関係」(『国文学解釈と教材の研究』一二・二　学燈社)
福田益和(一九七一)「解釈文法の立場より――『もぞ』『もこそ』についての私見――」(九州大学『語文研究』三一・三二)
松尾　聡(一九六八)『平安時代物語論考』(笠間書院)
――――(一九八四)『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』(笠間書院)
近藤泰弘(一九七九)「構文上より見た係助詞『なむ』――『なむ』と『ぞ――や』との比較――」(『国語と国文学』五六・一二)
山口堯二(一九八〇)『古代接続法の研究』(明治書院)
――――(一九九〇)「疑問助詞『やらん』の成立」(大阪大学『語文』五三・五四　島津忠夫教授退官記念輯)
仁田義雄(一九八四)「係結びについて」(『研究資料日本文法⑤助辞編(一)助詞』明治書院)
高山善行(一九九三)「モダリティとモード――古代語における仮定条件文の帰結表現をめぐって――」(『日本語学』一二・一三)

――大手前女子大学専任講師――